

# 巻頭言

茗溪塾

2008.1月号

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 心を決めて、受験にのぞもう。

茗溪塾塾長 宇野雅春

正月2日3日と箱根駅伝というのがあります。毎年、話には聞いたり、ニュースで見たりはするのですが、「正月特訓」の最中のことなので、特に関心を持ったことはありませんでした。今年は、全て「録画」をしてもらったのでその一部始終を見ることが出来ました。

今まで単なるマラソンのリレーくらいに考えていて、走る距離が42Km強という一般のマラソンに比べて、距離を分け合う団体戦のような一種気楽なレースとっていたのです。一人で走る距離も短い分、レースの責任も軽いように思っていました。

毎年なんであんなに盛り上がるのだろうと不思議に思っていたくらいでした。

お恥ずかしいことですが10位以内に入るとシード権というのが与えられ次の年も参加できるということも、本番に先駆けて行われる予選会は残りの10チーム分を争うということも初めて知りました。よくみていると、走者は次の人に「たすき」を渡すために自分の能力を超えてまで走っているようで皆倒れこむようにゴールします。一人で走るよりずっと重い責任がそこには大きくのしかかっているという事がビデオを見ていてやっと分かってきました。翌年の後輩達の参加権もかかっているわけですから当然です。

往路5人復路5人の計10人で、東京の大手町から箱根までと箱根から大手町まで「たすき」は引き継がれていきます。今年の往路は予想外の早稲田の優勝で、5人目のキャプテンの執念の走りが実を結んでの結果でした。昨年優勝した順天堂大学の5区の選手がゴール寸前で足が動かなくなるというシーンがありました。6人も抜く走りは快調に見えていたのに、ゴールまで50メートルというところで、ついに倒れこみました。何度も立ち上がって走ろうとしますがすでに足腰がいうことを利かないようで、周りで見ている人たちもその危うさに声援とも悲鳴ともつかない叫び声をあげています。後ろの車から医者とコーチが降りてきます。コーチが選手に触れた瞬間に順天堂大学は棄権になってしまいます。3日に予定されている復路の走行自体も無効になるのです。必死でコーチから逃れようとする選手。ついに医師によって赤旗が上げられます。その瞬間ゴールで翌日走るために待機している選手達の泣いている姿が映し出されました。5人目まで引き継がれてきた「たすき」はついに渡されないままその役目を終えました。

往路は早稲田大学が駒澤を振り切りましたが、復路は駒澤が逆転し結局総合優勝しました。ここで特徴的なのは強いチームというのは必ずしも特別強い選手がいるわけではないということです。10人のチームワークの方が強いということ。そして2日目の順天堂の失格について、大東文化大と東海大が走者がリタイアし、失格となりました。これも大会始まって以来のことだそうです。

このとき誰もが考えたと思うのですが、私も当然のように残りの9人の無念ということを考えてみました。走れなくなった走者はこのことを生涯重く背負うようにも思いました。でも、思ってしまったことと状況は違っていました。2日後のニュース番組で特集をしていましたが、選手達のインタビューでは、「走れなくなってしまった選手に申し訳なかった。」「皆が彼に甘えて負担を強いていた。」泣いたのは自分達の無念というより「彼の無念を思って」というような言葉が語られていました。早稲田大学のキャプテンの第5走者としてのすさまじいラストスパートは、逆に他の選手達に支えられることで可能になったことのように思えてきました。走るということは孤独な作業です。でも、多分そこには、人と人との熱い支えあいがあるということ強く印象づけられました。駅伝ならばなおのことなのだと思います。結果を出すのは、1人の力ではないということ。

箱根駅伝は、大正9年に渋谷寿光という人によって始められたといわれます。真つ暗な山道を松明で道を照らしながら実施されたというようなことが紹介されていました。

「勝利することではなく、その人が努力したかどうかである」という渋谷氏の言葉が残っています。社会に出るまで、目標へ向けた厳しい「努力」こそ、価値があるものであるということも教えてくれているように思います。どんなハプニングに襲われようとして、結果がどうであれ、その人の努力はどこかで報われるということを知っているようにも思います。生徒の皆さんも、受験という大きな「試練」ではありますが、今は心を決めて、最善を尽す時だと思えます。